Paganism.Heretic.

FORNEUS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｐａｇａｎｉｓｍ．Ｈｅｒｅｔｉｃ．

【Ｎコード】

Ｎ１９５０Ｚ

【作者名】

ＦＯＲＮＥＵＳ

【あらすじ】

俺は誰の指図も受けない。俺のやりたいようにやる。それが、破滅に向かっても・・・。

ってなわけで原作の平行世界スタート！

一誠の性格改変、原作ブレイクものです。あと、Ｒ－１８スレスレです

Ｌｉｆｅ．１

Ｓｉｄｅ一誠

俺の名は兵藤一誠。周囲の輩にはイッセーだのなんだの言われている。
他校の生徒すら俺の事を知っている。
例えば、今とか……

「お前、イッセーだろ？ココらは俺様のテリトリーなんだよ。調子くれてんじゃねぇぞ？やっちまえ！」

他校の生徒に囲まれたりしてな？

「適当に遊んでやるよ……。モブキャラ供が」

「舐めてんじゃねぇ！」

どうやら、最初の犠牲者はコイツらしい。
前から突っ走ってくる他校生の顔面に右ストレートをお見舞いする。

「ぐあぁ……」

呻き声をあげる他校生の腹に脚を乗せて踏みにじる。グチャグチャと内臓の潰れる音がする。
……なんか、愉しくなってきたぜ！

「ヒィッ……！？」

「無理だ！？……こんなの敵うわけがねぇ！」

「逃げるぞ……！？」

オイオイ……逃がすわけねぇだろうが？

「さぁ、死な無い程度に砕け散れ」

『――次のニュースです。昨夜未明、○○高校の二年生４人が路地裏で発見されました。４人の内の１人は内臓破裂残り３人は全身複雑骨折で病院に搬送されました――』

全く、物騒な世の中になったもんだなぁ？

「おっと、もう８：３０か。そろそろ学校に行かねぇと」

つー訳で学校に着いた。え？速い？知るか、んなこと
あぁ、早速眠い……ｚｚｚ

「あ、あのぉ……」

う～ん……。
誰だ、俺の眠りを妨げる奴は？朝から自殺志願者か？
命は大切にしろよなぁ……

「あのぉ……」

目をこすって声のする方を向くと――
黒髪が艶々でスレンダーな女子が俺の席の前にいた。
「やぁ、おはよう。何かようかな？」
え？変わり身が速い？そりゃ、美少女と話をするんだから、ちゃんとした姿勢で臨まないとな。
「わ、私と付き合って下さい！」
顔を赤らめながら彼女はそう言った。
「なんでこんな美少女がイッセーの彼女なんかにいいいい！」
「世の中のシステムが反転したとしか思えない……。イッセー、まさか何かの弱味でも握られているのか？」
なんて声が外野から聴こえる。
あぁ、ウゼェ……
まぁ、負け犬の遠吠えってやつだな。ザマァ

そんなこんなで浮かれたまんま授業が終わった。
え？デートの約束？……したに決まっておろうが！
日曜日～日曜日～♪

「ケタケタケタケタケタケタ……」

「あ？」

変な声が聴こえると思って後ろを振り向くと、明らかに、気違いな声をあげる上半身が裸の女、下半身が巨大な獣という出で立ちの人外の化物としか思えない異形がいた。

……俺の気分を害した罪は重いぞ？

「『迷宮絲』！」

地表から絲が這え出て人外を拘束する。

「さぁ、哭き叫べ」

グチャッ！！

俺の放った右手は奴の肋骨を難なくへし折る。

「ギア…アア……」

「オイオイ、まだこんなの序の序の序の口だぞ？」

更に右、左、右、左……と拳を撃ち込み人外の身体を変形させていく。

「コ、コロ……セ」

「馬鹿いうな。まだまだ死なせてやんねぇよ」

俺は心臓や脳を避けながら骨を砕いていく。手に血がこびり付く。

……人外でも赤い血の奴がいるんだなぁ？鉄の匂いもする。

殴り過ぎて内臓が飛び散ってるなぁ……

ズブッ！

「じゃあお前、コレを握り潰せよ」

俺は人外の腹からドクドクと鼓動する心臓を傷付けないように抉り出す。
自分の手で終わらせてあげようというんだ。俺、優しいだろう？

「ホラホラ、さっさと潰せよ。嫌なら俺が潰させてやるよ」

「――――！？」

人外の腕を引き抜く。辺りに血が飛び散るが気にしない。
ソレを手で持って――

グチャッ！

そのまま握り潰す。
……脳が生きてるかも知れないから潰すかな？
右手に力を込めて頭蓋骨を砕く。
液体がスゲェなぁ？脳漿か？
取り敢えず砕けた頭蓋骨を真っ二つに開いて脳を引っ張り出し脳を壁に投げつける。

暫くすると、人外の身体は霧のようになり消え去った。
跡に残るのは、充満した血の匂いと飛び散った血の痕だけだった。

ふぅ、遊びすぎたかなぁ？血の匂いが染み付いてるなぁ……
さっさと帰って風呂入って寝よ。

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

Ｌｉｆｅ．２

Ｓｉｄｅ一誠

ヤッフー！ヒャッハー！
……すまない、少し取り乱した。
何はともあれ今日は日曜日！そう、デートだ！
彼女の名前？まだ言ってなかったか？
天野夕麻っていう名前だ。
取り敢えず、三時間前に待ち合わせ場所に行っておこう。

てな訳で三時間後だ

「ま、待ったかなぁ？」

「いや、俺も今来たところだよ」

男なら一度は言ってみたい言葉を言えたぜ！

それから、２人で街でうろうろしたり、絡んできた不良を再起不能にしたり、追い掛けてくる人外の気配を避けたりした。
いやぁ、なんかもう満足です。家族に看取られながら老衰で死ぬく

らい。
後二つには些か腹が立つが……。
そんなこんなで、夕暮れ時になり、今は町外れの公園にいる。
人気が無いなぁ……？まぁ、ありがたいが。

「ねぇ、一誠くん」

「ん？なんだい？」

「私たちの記念すべき初デートだから、一つお願いしてもいいかな？」

「あぁ、いいよ」

「あのね……死んでくれないかな」

夕麻ちゃんはうっすらと涙を浮かべながら言った。

ズブッ！

俺の腹に何かが突き刺さる。

……コレは…槍？

「ゴメンネ、一誠くん……」

「遅かったみたいね……。私の領地でこんなことをして赦されると思っているの？」

さっきまで、撒いていた人外が俺の前に姿を現した。
現れた人外は血のように紅い髪をした女だった。
まともなカタチの人外もいるんだなぁ？

「喰らいなさい！」

人外は手の平から巨大なドス黒い球体を造り出す。
オイオイ、そんなもんはファンタジーの世界だけにしてくれよな？

「させるかってんだ！」

「え？」

俺は絲を片手から出し、夕麻ちゃんを抱き抱えながら、近くの電柱にくくり付ける。

「ッ！？神器！」

どうやら人外は驚愕しているようだ。セイ、何だ？良く分からんがココから離れんのが得策だろう。

取り敢えず撤けたかな？

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅ夕麻？

私はどうしたらいいのかなぁ？

上からの命令で、神器を宿す、危険因子を始末するように言われていた。

今回は、神器を保有している人間の一誠くんを殺すように。
だから人気の無いところで始末するためにデートという大義名分であの公園に呼び出すことにしていた

だけど、私は彼の事が本当に好きになった。
そして、遂にあの公園にたどり着いたの。
私はイッセーくんを殺そうとして光の槍で貫いた。
だけどそこに紅髪の悪魔が現れて、私を消滅させようとしていた。
もう、いっそのことココで彼と一緒に死のうと思っていると、彼は自分を殺そうとした私を抱き抱えて……。

ＳｉｄｅＯｕｔ

Ｓｉｄｅ一誠

イテテテ……。
つーか、コレは死ぬんじゃないかな？意識が朦朧としてるし、出血凄いし。まぁ、美少女に殺されんならそれも本望ってか？

「ゴメンネ、ゴメンネ……」

夕麻ちゃんが、泣きながら俺の腹の傷の手当てを始める。

「別にいいよ。だから、泣き止め、な？」

「ココじゃ応急手当てしかできないから、私が住んでいる所に行くね」

夕麻ちゃんはそういうと、背中から黒い翼を生やして今度は俺を抱き抱えながら空へと飛び立った。

ココは教会か？十字架あるしな。ただ、礫になっている聖人の彫刻の頭部
が破壊されてんのは如何なものか？

「コレでなんとか……」

どうやら、俺の手当ては大方終わったようだ。

「ありがとう」

「ごめんなさい……。私のせいで」

「その話なんだが、詳しく教えてくれないか？」

俺は何度か人外を殺したことはあるがソレが何なのかは良く知らな

かった。

「うん。説明するね……」

ココでソレを聞いていなければ何も始まらなかったのかも知れない。

ＳｉｄｅＯｕｔ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1950z/

Paganism.Heretic.

2011年12月8日01時02分発行